

平成26年度文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール

2014 SGH通信

号外32 岐阜県立大垣北高等学校 SGH 推進部

海外フィールドワーク（カンボジア・ベトナム）帰国報告

【3月9日（月）ホーチミン】



【ムトー精工・ベトナム訪問】

岐阜県各務原市に本社があるムトー精工株式会社(1970年創業)は、SONYやCANON・デンソーなどを主な取引先として、デジタルカメラや一眼レフカメラなどのプラスチック部分を製造する企業である。1995年に、国内の円高不況を背景にしてベトナムに進出した。現地工場の野田社長様から企業経営の説明を受けた後、派遣生徒たちは、「ベトナム進出のメリットは?」「地元企業との連携は?」「原料はベトナム産?」など、矢継ぎ早に質問して、社長様から丁寧な回答をいただいた。



【OKBホーチミン事務所訪問】

地元大垣市に本社がある大垣共立銀行(明治時代の第153国立銀行が起源)は、オイルショック後の昭和53年から海外業務を開始した。昭和61年香港駐在員事務所・平成元年香港支局開設を皮切りに、これまで上海・バンコクに駐在員事務所を構えてきた。平成24年度にはベトナムにホーチミン事務所を開設し、地元企業のベトナム進出をサポートしてきた。今回の訪問では、開設から尽力されている伊藤所長様から現在の活動状況のお話を聞き、その後派遣生徒から質問を行った。「海外に進出してくる企業への具体的なサポート内容は?」「アシスタント(現地雇用者)と2人で活動していく大変さは?」「今後の活動予定は?」などの質問に対して、真摯なお答えをいただき、生徒達も納得顔であった。

【3月10日（火）シェムリアップ】 空路：ベトナム→カンボジア（シェムリアップ）



【CLC（コミュニティ・ラーニング・センター）通称：寺子屋訪問】

CLCは、通常の小学校に通うことが経済的に困難な子供たちを教育している機関で、東京大学教育学研究科の北村准教授の御紹介で訪れる機会を得ることができた。日本からの支援が学校経営の支えになっているものの、文房具などの学習用品が不十分ななかで、教育活動が行われている。学校規模が小さいため、午前中に16名・午後には16名が訪問して交流を行った。「幸せなら手をたたこう」を一緒に歌ったり、新聞紙で兜を折ったり、紙飛行機をつくったりと、言葉によるコミュニケーションが難しいなかでも、心が通い合う交流ができた。帰国後の生徒感想文には、「教育の大切さを改めて感じた」という記載が多くみられた。



そして別れ際に、本校生徒から寄付のために集めた文房具を手渡した。



【アンコール小児病院訪問】

アンコール小児病院は、認定NPO法人「フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN」が診療活動を支えているシェムリアップ市街地にある病院である。今回この病院を訪れることになったのは、大垣市に本社のある揖斐川工業株式会社が主催する井上国際交流基金事務局から紹介を受けたことがきっかけとなった。同基金からも毎年寄付行為が行われており、大垣市とも縁がある病院である。現地での説明や病院内の見学から、医師不足の深刻さと医療技術の遅れを目の当たりにした生徒達は、「国際医療」研究の意義深さを改めて感じ取った様子であった。

【3月11日（水）プノンペン】 空路：シェムリアップ→プノンペン



【倉田ペッパー訪問】

カンボジアの胡椒は、1960年までは世界でも有数の生産量を誇っていた。しかし、ポルポト政権誕生に至る内戦によって、胡椒生産は衰退した。2006年にプノンペンで操業を開始した「倉田ペッパー」は、倉田浩伸社長の強力なリーダーシップで、伝統的な農法で胡椒を栽培し、加工から卸・販売まで一貫して行い、カンボジアの胡椒生産の復活を目指して生産活動に励んでいる。倉田社長様からは、起業の苦労、海外で働くことの大変さ・楽しさ・意義等、密度の濃いお話を聞くことができた。その後、少人数班で工場内をめぐり、胡椒の選別作業などを見学することができた。

【3月12日（木）プノンペン】



【シソワット高校での交流】

今回の海外派遣交流のメインとも言えるシソワット高校での交流会を行った。最初に、本校生徒代表が、日本、岐阜県、本校の概要及び本校のSGH事業の概要を説明した。その後、シソワット高校の説明が行われ、生徒達は前後半各45分の交流を行った。交流会の始めは、マインドマップを活用して、お互いの興味関心を理解しあい、次第にSGH課題研究で学んだ「持続可能な社会の実現」に向けた意見交換を行うことができた。

カンボジアで一番優秀な高校であると言われていただけあって、シソワット高校生徒の英語力に圧倒されながらも、派遣生徒達は懸命に現地フィールドワークで学んだ成果を語り、交流を楽しんだ。

【3月13日（金）プノンペン】



【王立プノンペン大学での交流】

「SGH 課題研究」で各自が進めてきた研究内容が、「アジアの持続可能な社会の実現」に資する研究になっているか否か、研究の妥当性に意見を貰うことを最大の目的として交流を行った。大学で国際開発を学んでいる学生たちにとっても、簡単に答えられる内容ではない様子で、本校生徒の英語論文をじっくり眺めて誠実に意見を述べる学生の姿が印象的であった。